

Title	<書評> Franco Cambi, "Collodi, De Amicis, Rodari. Tre immagini d'infanzia", edizioni Dedalo, Bari, 1985
Author(s)	マルチェッラ, マリオッティ
Citation	年報人間科学. 23-2 P.397-P.404
Issue Date	2002
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/7396">https://doi.org/10.18910/7396</a>
DOI	10.18910/7396
rights	
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>



ど)とカテゴリー(「子ども観」・「世話」・家族による「プライベートタイゼーション」)を発見した。アリエス以降の研究は「歴史的な性格を明確に持つような『子どもに対する態度』の存在に光をあててきた。この『態度』は決して『自然』に内接されるものではなく、『社会』と『文化』だけに内接されるものである」。(p.6)アリエスの『子供』の誕生は子どもの社会歴史学にとつての基礎研究であり、子どもに対するイメージの歴史を考察するうえでもヒントを提供するとカンビは続ける。

しかし、アリエスの子ども像に関する豊かな研究は十九世紀までを対象としたものである。現在では、「子どもが『無垢』で『従属』な、素直で穏やかな外見を失った。子ども期は、悲劇にさえなりうるドラマチックな時期として迷路に入り込んでおり、順応と解放、適合と『他者性』との間で引き裂かれる時期としてみなされるようになりつつある。…このような現在も変化する子どもについての『イメージ』の装置を」(p.7)カンビは探究しようとする。

カンビによれば、子どもの社会歴史学の限界は、現在の複雑な子どものイメージと現在、実際に存在する子どもの双方を理解できない点にある。なぜならアリエスの研究も含めて社会歴史学が扱う資料からは、子どもの理解よりも子どもの管理を目指すような子どものイメージしか浮かび上がらせることができないからである。この限界を乗り越えるには、つまり子どもの理解を目指すような子どものイメージを把握するには、扱う資料を変える必要があるとカンビはいふ。その資料とは子ども向け文学などといった「想像力の資料」

である。(p.10) 註2

そこで、カンビが選択したのは子ども向け文学の作者であるカルロ・コッローディ(Carlo Collodi)・エドゥモンド・デ・アミチス(Edmondo De Amicis)・ジャンニ・ロダリ(Gianni Rodari)である。「彼らは子どもの『発見』(アリエス)から子どもの『理解』(カンビ)へと連なる道筋に、つまり子どもの『自律(autonomia)』の認識から子どもの『特性(specificita)』・『差異性(differenza)』の探求へと連なる道筋に権威をもって内接している」(p.7)。

カンビの著書『コッローディ、デ・アミチス、ロダリ。三つの子ども像』は、子ども像を現代へ展開した研究と思われる。

## 2 カンビによるコッローディの子ども像

カンビはコッローディ 註3 の経歴と彼の作品全てを結びつける要素を「子ども像」としている。コッローディの子ども像は以下の三つの時期に分けられている。

第一期は、新聞や学校向けの作品で歴史的な子どもを描いている時期である。 註4 ここではイタリアの近代化を反映するブルジョアの子どもと庶民の子どもが描かれている。階級と教育の違いによって、それぞれの子どもの社会化の「結果」は違うが、大人への変化という過程は同じである。コッローディは歴史的に異なる二つの状況から「前社会化・前文化化」の子どもの本質を探る。この段階で、順応主義は後の『ピノキオの冒険』(1883)ほど強調されていない。

「子どもの無秩序は、まだ純粋な生命力や不服従にすぎない」。(p.40)

第二期は、コッローデイがペローを翻訳した時期である(1875)。コッローデイが妖精の世界と悲劇的で残酷な子どもの新しい次元を把握するのは、この時期である。「…そして、狡猾な子どもの釈放と解放の道具として評価しはじめる」(p.38)。子どもは必ず大人になる。だからこそ、大人になるにしたがって、子どもが象徴する「自由」は必ず敗北する。ブルジョアの子どもに焦点をあてるこの時期は「子どもの道徳」を思い起こさせる。この道徳は自己主義に克つ社会化(同情)と子どもが生まれながら持つ正義・平等・人間的な義務という意識から生まれる。この第二期において、コッローデイは社会的な子ども像から、より普遍的な子ども像を抱くようになる。

第三期は、「ピノキオ」を「子どものための新聞(Giornale per i bambini)」に連載する時期である(一八八一年七月—一八八三年一月)。一八八三年に本一冊として出版。当時、コッローデイは集中して物語文学だけを執筆する。この時期、彼は子ども本質として、子どもの特徴と矛盾、可能性と曖昧さ、誘惑と刑罰を描き、子どもに關するより詳細で深い理解を導きだす。子ども期は人生の柱である。しかし、不幸にも子どもは大人のアイデンティティを獲得せざるを得ない。よって、子どもは死と復活の象徴となる。この意味でピノキオは子どもの原型とも、普遍的な子どもともいえる。

子どもの普遍的な特徴がピノキオに象徴化されていることを証明

するため、カンビは次の三つのエピソードを代表として取りあげる。「ピノキオと殺人の出会い」、「おもちゃの国」、「鯨からの脱走」。コッローデイによる子ども像を把握するため、カンビは元型的、支配的、構造的な次の要素を把握する。それはエディプス葛藤、飢えと逃亡の二項式(＝必要/欲望)、「社会へのイニシエーション」である。カンビは、これらの要素を検討し、子どもに対する理解の先駆者であったコッローデイによる貢献を抽出する。それは、大人から独立した次元として、(悲劇的な)逃避のユートピアとして現れる子どもの自存性の発見である。

### 3 カンビによるデ・アミチスの子ども像

次に分析されるのはイタリア国の統一化後活動するデ・アミチスである。デ・アミチスの作品に対しても、カンビは研究道具として「子ども像」を使う。これにより、デ・アミチスについての先行研究とは違い、「クオレ」(＝『愛の学校』、1888)だけではなく、彼の全ての作品を再読できるようになる。ブルジョアの子どもと庶民の子どものどちらもデ・アミチスの作品に登場する。そこに登場するのは、すでに社会的な子どもであり、そのような子どもの心理的な特性と社会化の過程をデ・アミチスは描いている。デ・アミチスの子ども像は、普遍的な子どもというよりも、むしろ実際の子どもに近く、独立していない、イデオロギーに影響を受けている子どもといえる。いわば「他人のための子ども」である。(p.96)

ただ、デ・アミチスが大人との子どもの本質的な違いも同時に把握していたことをカンビは強調する。子どもは人間にとつての貴重な可能性をあらわしている。子どもの独立した価値は、純粋な価値の感情的な意識として見なされている。子どもの心 (Globe・クオレ) の中には、平等と正義に基礎をおく人間の博愛という価値観がすでにある。教育を通じてこの価値観に光をあて、社会の中でそれを広げることができる。デ・アミチスにとつて、子どもの自存性は道德の次元に属する。このようにデ・アミチスによる子どもは自存性と社会的な役割との間にある緊張の中で生きている。デ・アミチスの子ども像は、心とイデオロギーとの間に生きている子ども像である。

「クオレ」は現代までポスト・リソルジメントの平信徒道徳法典として見なされていた。先行研究と同様、カンビも「クオレ」の登場人物の社会的な位置と物語を横切るイデオロギーを分析する。しかし、カンビは子ども像という新鮮な視点でデ・アミチスの作品を再読する。それにより、「クオレ」のイデオロギー的な側面だけでなく、むしろ作品の社会的・政治的な重要性を浮かび上がらせている。子どもの理解へのデ・アミチスの貢献は二つある。一つは、子どもとイデオロギーという関係を把握したことであり、もう一つは (イデオロギーと別の方向へ進むことが可能である) 子どもの自存性を把握したことである。ただし、カンビによると、この発見には「自然」と「社会」を混同し、区別していないという限界がある。また、人間の可能性である子どもの心 (自存性) を良心として捉えることで、感情主義というイデオロギーに陥っていることも限界であ

る。つまり、デ・アミチスは心とイデオロギーを混同し、一つとして捉えてしまっている。

カンビによれば、デ・アミチスが描くのは社会的な子どもである。ただし、子どもの中には本質的な価値観が存在する。それはクオレ (良心) といえる。デ・アミチスの子ども像は、この二つの内と外の間を行ったり来たりする。

#### 4 カンビによるロダーリの子ども像

カンビによれば、ロダーリ<sup>1910</sup>の子どものイメージは「弁証法的なイメージ」である。コッローデイが強調した子どもの反社会的な部分 (飢えと逃亡、必要/欲望) と、デ・アミチスが強調した子どもの社会的な部分とそうではない部分 (良心)。この二つを合わせてロダーリは新しい子どものイメージに至った。「ロダーリが描く子どもは遊びと任務の間にリズムをとっている。この二つの時間の往復に子どもは複雑な弁証法を体験する。その弁証法は、一方で、享受、ファンタジーによる解放、創造力の楽しみへ子どもを向かわせる。他方、その弁証法は、平等と正義、普遍的な解放の意思作用に基づいているはつきりした道徳認識、社会認識へ子どもを向かわせる。ただ、前者の側面は生まれながらにして子どもの中に存在する側面である。これに対して、後者の側面は社会的な接触や参加と、民衆的なグループにおいて発達する連帯とを通じてのみ構成される側面である。つまり、後者は教育と政治意識を暗示している。だが、

創造力と任務の間には特別な関係がある。解放された想像力の豊かな精神は、イデオロギーから離れることができる。また、このような精神は（常に社会的である）遊びを通じて連帯と平等という原理を感じる事ができる。要するに、想像力と道徳認識・社会認識の間に深い対称性がある。いや、むしろ想像力と道徳認識・社会認識が総合しているのである。」(p.126)

コッローデイとデ・アミチスを解説したように、カンビはロダリーの解説にも子ども像という道具を使う。ロダリーの子どもの像は幾つかの次元で弁証法的であるとカンビはいう。コッローデイは「(反社会) 逃亡と(リビドー) 飢え」という二項式に別れている子ども像を発見した。デ・アミチスは「大人のための子ども」イデオロギーと心(道徳的な自存性)の間で揺らぐ子ども像を発見した。ロダリーの子どもの像は普遍的でありながら、歴史主義に基づく子ども像である。自由と解放へ導く遊びと創造力、社会化へ導く道徳と社会的な任務という二つの間の闘争が子どもの本質である。

カンビによれば、ロダリーは子どもを我々の過去の過去にある、損なわれていない「自然」と関連させるより、むしろ将来やユートピアと関連させた(p.150)。「現在と将来、遊びと任務、子どもと『新しい人間』のターニング・ポイントを創造力という性格であると認め、創造力を絵の中心においた」。(p.150)

ロダリーの子どもの本質的にユートピアへ向かう遊びと任務のジレンマであり、人間のユートピア的なパラダイムである。(p.137) ユートピアへの傾向は、子どもの他者性(alterita)としてみなされ

る。革新を實行するには子どもの他者性を守り、それを強化する必要がある。創造力はそれを可能にする。創造力は子どもにもっとも特有用なものである。現実から素材を得る想像力は、創造力の基礎となっている。想像力、創造力、子どものユートピアへの傾向(他者性)は、教育を通じて強化される。(p.137)

「ロダリーの『実験』は(グラムシの中で闘争していたアイディア、つまり自由主義伝統と社会主義伝統の)『ジレンマ』だけではない。批判と構築的な実験である。マルクス主義思想においてよくあったアンチノミーを解くことを可能にした実験である。<sup>個性。</sup>…そして、その実験は、(たとえば、下準備であった前世紀のデ・アミチスのモデルよりも) 現代的に改訂された弁証法的なモデルの構築に道を開いた。だが、すぐ言わなければならないことがある。ロダリーのモデルも完全ではない。なぜなら「悲劇」の不在と、最後までロダリーを特徴づけるしつこい「教育主義」があるからである。」(p.136)

遊びを通して子どもは自存性を表現し、分岐(≡視野が広がって想像力が豊かな) 思想と社会化を進展させる。分岐思想を支えているのは創造力である。創造力は遊びから生じる楽しみと笑いから栄養を得る。楽しみと笑いとは社交的なコミュニケーションを成立させ、道徳的な次元と人間学的な次元で結びつく。道徳的な規則は「今・ここ」を越えるものであるが、子どもは特定の会話と特定の文化の中で生きているのだから歴史を越えるとはいえない。この意味でロダリーの子どもの像は弁証法的な子ども像である。子どもは独立した

存在であるが、社会や歴史の外部に子どもの自存性は存在しない。ロダリーは、その歴史的な次元に、直覚からではなく、(教育を必要とする)自由な(解放的な)体験から生まれてくる普遍的な人間性(人間の真正性)を挿入する。

「ロダリーは子どもの弁証法的な解釈を提供した。しかも、それは開かれた弁証法的な解釈である。子どもの多様性と矛盾を把握できるとどまらず、子どもの内面的緊張とアイデンティティーを構成する座標をも獲得できるような弁証法的な解釈である。社会的な子どもと自存的な子ども、遊びと道徳意識、疎外とユートピアは、それらの領域の境界(と深い特徴)を定めるようになる。…子どもは隔離から解放され、権利を持つて、主役として社会と政治のゲームに挿入される。隔離とともに従属というもう一つの側面からも解放される。これも本質的に「ブルジョア的」である。子どもが解放される。子どもが自分を解放する。子どもが(創造力を通じて自由を目指し、自由を創ることによって)自由の方向へ向かって活動する。」(p.150)

「ロダリーは子どもの多重的で、ダイナミックで、緊張的な(つまり弁証法的な)イメージを提供した。『ジんテーゼ』というメリックトだけではなく、豊かと深刻というメリックも持つイメージである。」(p.152)

ただし、デ・アミチスと異なり、ロダリーにおいては、子どもが表現する人間の可能性は普遍的な道徳ではなく、遊びによるコミュニケーションを通じて発展する道徳である。また、コッローディと

デ・アミチスと異なり、ロダリーが描く子ども像は社会化によって去勢されない<sup>1)</sup>。ロダリーが描くのは、彼が目指す、想像力を強化するような社会化によって、新しい完全な人間を創るという革新を可能にする子どもである。

「ロダリーの作業は複雑である。子どもという見落とされていた領域へマルクス主義の理論を広げようとしている。そして、子どもを「弁証法」と「ユートピア」として解読しようとしている。さらに、「子どものユートピア」を解放戦略と結びつけようとしている。このような教育的・政治的な計画において子どもの本質的な他者性が見えなくなる恐れがある。ロダリーの子どもの必ず「大人」の領域へ連れ戻される。」(p.151)

## 5 カンビの忘れ物

カンビは、ロダリーにとっては「子どもは必ず「大人」の領域に連れ戻される」ものであり、それが子どもの他者性を見落とすとしてしまふから彼の議論の欠点と述べている。しかし、カンビが欠点と見なす部分を、ロダリーが考える想像力に焦点をあわせて読むとき、カンビとは違った見方ができるのではないか。

ロダリーは、子どもを描くことで、想像力がどのように発達するか、とりわけ想像力が周りの世界(＝社会)を認識するためにどのような働くかを明らかにした。そのことを通じて、社会認識へ向かう想像力を強化することの必要性を主張し、それがどのようにして可

能になるのかについても議論を展開している。そうして辿りついた結論が、社会を認識するために必要な能力、すなわち社会的想像力は、子ども（期）ばかりでなく大人（期）においても内在するものであり、「人間」の本質として捉えられなければならないということだった。つまり、ロダリーにとつて子ども像は人間像と一致している。

こうした見解を欠点と捉えるカンビは子どもだけに焦点を合わせることによって、ロダリーの「議論」を狭い視野で見ているのではないかと筆者は考える。ロダリーが強調したのは、人間の想像力は常に同じ基礎があることである。つまり、大人にとつても、子どもの場合と同じように、自分と社会を認識するために、想像力が必要なのである。ただし想像力とリアリティーの関係が、大人と子どもとは逆転している。子どもは知らないリアリティーに接近するために想像力を使う。それに対して大人は知っているリアリティーから知らない次元（ユートピア）に向かうために想像力を使うのである。

このようにロダリーの想像力を解すれば、アリエスの研究を再評価することもできよう。アリエスは、先生の日記、絵、両親の手紙などといった想像力の資料を使って、子どものイメージの制作方法とそのイメージを作り出した社会を研究した。アリエスにとつても、子ども像は独立して存在するものではなく、大人像と相関するものであった。いかにして子どもと大人の区別が社会的想像力のなかで生成したかを明らかにすることが、アリエスの眼目だったといえる

かもしれない。こうしたアリエスの方法は、ロダリーの想像力の理論と組み合わせることで、カンビの想定とは異なり、二十世紀以降から現代に至る子どものイメージの問題にも延長可能なのではないだろうか。

現代の子ども像を解明するために参照される想像力の資料といえ、まず、アニメやビデオゲームがあげられるだろう。筆者にとつてとりわけ関心があるのは、アニメから浮かび上がる現在の子どもの像である。こうした子ども像は、カンビが二分した、子どもに関する、「社会と経済に焦点を合わせている」社会歴史学と「イデオロギ」と文化に焦点を合わせている」イメージ（想像力）の歴史学との双方にまたがるものである。ロダリーの想像力論を、その力を認めただ上であらためて前述のように解すれば、アリエスの研究がそうであったように、一つの歴史研究の流れは、現在において架橋することが可能であり、また架橋する必要があると思われる。

#### 【脚注】

- (1) 2011年現在、フランコ・カンビはフィレンツェ大学教育学部一般教育学の教授として、教育哲学や子どもの歴史学や哲学を専攻している。最近の代表的な作品は以下の通りである。Antifascismo e pedagogia. 1930-1945 『反ファシズムと教育学1930-1945』(1980) Storia dell'infanzia nell'Italia liberale 『自由主義イタリヤにおける子どもの歴史』(1988, S. DiIivieri 共) L'educazione tra ragione e ideologia 『理性とイデオロギーの間の教育』(1989)



- La ricerca storico-educativa in Italia 『イタリアにおける歴史・教育研究』(1992) 『Storia della pedagogia 『教育学の歴史』(1996)』
- カンビは、教育学の多面的な研究を進めながら、八〇年より、同年「」となったロタリーの仕事を探究しはじめる。その探究のなかで以下の論文を執筆する。「Rodari e l'infanzia」『ロタリーと子ども』、「Scuola e città」『学校と都市』(1980)、「L'immagine formale della pedagogia nell'opera di Rodari」『ロタリーの作品における教育学の「形式」的なイメージ』「Se la fantasia cavalca con la ragione. Prolungamenti degli itinerari suggeriti dall'opera di Gianni Rodari」『ファンタジーは理性とともにまたがる時。ジャンニ・ロタリーの作品に薦められた旅程の続き』、Juvenilia, Bergamo, pp.45-52 (1983)、「La ragione divergente nella "Fantastica" di Rodari」『ロタリーの「ファンタジー学」における分岐理性』、「LG argomenti」『若者文学 話題』(1983)。
- 1960年『Rodari pedagogista 『教育学者のロタリー』とどう一冊の著書にそれまでの研究成果をまとめる。
- (2) アリエスが開いた子ども社会歴史学は社会と経済に焦点を合わせているが、カンビがめざす子どもについてのイメージの歴史学はイデオロギーと文化に焦点を合わせている。アリエス研究の中ではこの二つの側面が混同されていた。前者が強調され、後者はヒントに過ぎなかつた。(p.10, 11)
- (3) Carlo ColliodiとCarlo Lorenzini (トランソム1826-90) のペンネームである。
- (4) 言及される作品は庶民子どもを中心とした『Divagazioni critiche-umoristiche 『批判的・ユーモラスな脱線した話』(遺著 1892)』、『Occhi e nasi 『目と鼻』(1881)』、『Note gaie 『楽ジョケ』(1860年代)』、『トブルジエアの子どもを中心としたGiannettino 『ジャン・
- ネッティーノ』(1875)、『Minuzzolo 『シムツォロ』(1877)』、『Storie allegre 『楽ジョケ』(1887)』である。
- (5) Gianni Rodari (1920-1980)は北イタリアの教育者、記者、童話作家、詩人である。「電話で送ったお話し」、「空と陸のフィラストロッカ」、「間違いたらけの本」などがある。「ファンタジーの文法」はただ一つの彼の理論的な作品である。
- (6) 「ロタリーの子ども像は、美学とマルクス主義、知識心理学と教育学といった様々な理論的方針の交差点上に形成された、成熟した生きとしがいのシンテーゼである」(p.150)
- (7) ピノキオの人形とピノキオの肉体。「クオレ」におけるエンリコの良心とフランティの悪。コッロディでは、ピノキオ(子ども)は人形を捨てることで人間(大人)の社会に入ることができる。デ・アマチスでは、他人のための子どもにならないと(＝自分を捨てないと)社会に入ることができない。